

元代の南海廟祭祀

メタデータ	言語: jpn 出版者: 駿台史学会 公開日: 2018-07-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 櫻井, 智美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19469

元代の南海廟祭祀

櫻井智美

要旨 唐代における最大の貿易港は広州であり、宋代にも貿易で繁栄していたことが知られる。しかし、南宋・元代には泉州が世界的な大規模港であるという記述が見えるようになり、広州への言及は少なくなる。そのため、元代の広州の歴史を検討する先行研究は少なく、その歴史的・地理的な位置づけを明らかにする必要がある。そこで、本稿では、元代広州の南海廟における祭祀活動を分析することによって、中央政権の広州に対する政策と広州社会の変容の一端を明らかにする。

まず、南宋末から元中期にかけて広州周辺で起こった出来事について説明し、広州の都市としての大まかな変化と時代的特徴を明らかにする。南宋末に広州周辺は宋元両軍の主戦場となり、広州の海外貿易による繁栄は一旦途切れたが、そこから10年ほどの間に復興した。広州は首都大都から遠く離れ、反乱も頻発したが、北方からの移民による人口増加が復興を後押しした。元代の広州は、南海貿易の拠点としてのそれまでの位置づけに加え、占城など東南アジアへの軍事基地として機能した。

広州にある南海廟について、次に検討する。南海廟は隋代以来一貫して朝廷からの信仰・保護の対象となっていた。唐宋時代には、岳鎮海瀆の神の一つとして繰り返し封号が送られた。南宋時代に広州には南海西廟が建設され、庶民の信仰を集めたが、国家祭祀は一貫して元来の南海廟で執り行われた。元代には至元28年(1291)南海神に封号が加えられ、それを機に南海廟が修建された。元末になると、南海廟への国家の祭祀活動はますます盛んになった。その理由は、岳鎮海瀆の祭祀が王朝の領域を象徴したからであり、また、外敵から国家を守る神々と考えられたからであった。

キーワード: 元代, 広州, 南海廟, 岳鎮海瀆

はじめに

唐代において最大の貿易港は広州だという意見に異論はないだろう。それが、南宋・元代に至ると、泉州が世界的な港であるという記述が見えるようになり⁽¹⁾、広州への言及は少なくなる。広州はどうなってしまったのか。10世紀に編纂された『シナ・インド物語』からは、広州が唐末の黄巢の乱によって徹底的に破壊されたことが読み取れる⁽²⁾。だからといって、広州がそのまま元代まで復興しなかったわけでは決してない。南宋時代、泉州にトップを奪われたとはいえ、広州は宋元時代を通じて貿易を発展させていったことが指摘されている⁽³⁾。

では、南宋・元代の広州は、王朝支配下どのような位置づけにあったのか。あるいは、唐代に南海貿易で栄えた広州の街はどのように変化したのか。元朝は旧南宋地域を一つの固まった地域として把握し、江南行御史台や江南行枢密院を置いた。そのため、元代の江南はひとり長江下流域を指すのみならず、現在の嶺南地域も含めた長江以南を指す場合が多い。広州は江南というかたまりの中でも最南の大港湾都市であり、江南を縦に三分した江西行中書省の南部の中心でもあった。

元代の広州のあり方を考える視角を得るべく、筆者は2015年12月末から2016年1月にかけて泉州と広州の元代関連史蹟を踏査した⁽⁴⁾。そこで目にしたのは、「海のシルクロードの玄関口」として共に自己をアピールする両都市の姿であった。元代を研究する筆者にとって、蕃坊がたてられ市舶司が設置された泉州は、まぎれもなくシルクロードの出発点に見える。一方、大都会広州は、自らを歴史的に一貫して「海のシルクロードの玄関口」であったとするが⁽⁵⁾、実のところ、元代の広州がどのような様相であったのかを明らかにする専論は驚くほど少ない。通史の一コマとしてわずかに言及されたり⁽⁶⁾、あるいは、海外貿易に注目した経済的な考察が行われたりするにとどまっているようである⁽⁷⁾。元代の広州に関する文献資料は必ずしも乏しいわけではなく、この時代の広州の様相と位置づけを探る試みは、社会面、政治面、経済面、あるいは文化面など多様なアプローチが可能であろう。そのうち、本稿では、広州の南宋から元への都城とその行政組織の変化を概観した上で、広州に存在する南海廟（南海神廟）の歴史とその役割について近年の研究を総括しつつ考察を進める。筆者はこれまで、元代の岳瀆祭祀に注目し、主に濟瀆廟と北岳廟をそれぞれに取り上げて、祠廟をめぐるさまざまな問題について論じてきた⁽⁸⁾。そこで、それらの考察で明らかになった事象を比較材料として、元代の南海廟の祭祀活動を分析し、時代的特徴と背景となる歴史を明らかにしたい。

第1章 元代広州路の成立

第1節 宋代の広州と宋元交替

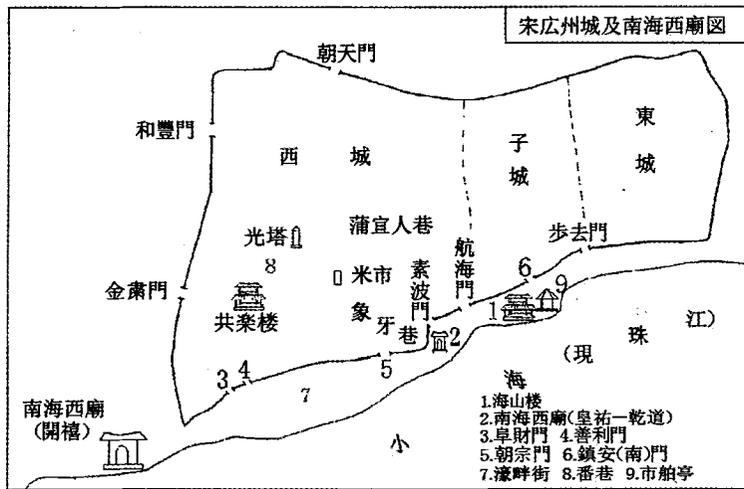
広州に史上初の市舶司が置かれたのは、唐玄宗開元2年（741）のことであった⁽⁹⁾。それは

すでに貿易港としての広州の隆盛を反映していた。「はじめに」で触れたように、唐末の黄巢の乱で打撃を受けたものの、まもなく復興したと考えられている。唐が滅亡すると、南漢が広州を首都としてたち、971年に北宋に降伏するまで、比較的安定した政権を保った。南漢政権の安定の背景には、唐代における北からの官僚の移住や、嶺南地域の水運の整備と海上貿易との連結等があった⁽¹⁰⁾。宋朝は広州を中心とする南漢の故地に嶺南道を設置し、改めて市舶司を広州に設置した。宋代の広州については森田健太郎の専論があり、北宋時期の州城や州学の建設・復興の経緯が詳細に論じられている。皇祐4年(1052)、儂智高(チワン族とされる)が広州の人々とともに挙兵して州城を包囲したことをきっかけに、その後、州城の拡張事業や州学の建設が進められ、在地の士人劉富と蕃坊の蕃長辛押陀羅がそれに協力した様子が描かれている⁽¹¹⁾。元代広州城は宋代の州城を襲ったとされているため、宋代広州の変化についてやや詳しく見ていこう。

『大徳南海志』巻8「城濠」によれば、広州城内には三つの区画があり、旧城・東城・西城と区別されていた⁽¹²⁾。旧城は基本的に漢の武帝時代以来踏襲されてきたもので、宋代には子城(中城)と呼ばれることもあり、引き続き政治・経済の中心的な機能を持った。東城は、神宗熙寧元年(1068)に広南東路経略使呂居簡によって旧城の東側に修築された。西城は呂居簡の後任の程師孟が熙寧4年(1071)に建てたもので、周囲は十三里ほどだった。西城の南はおおむね現在の大徳路に沿っており、大南路の西端から大徳路を西に向かい、北に折れて人民中路・人民北路を通り、さらに東に折れて盤福路・東風二路を通過して南漢時代の北辺の城壁につながる位置にあった。蕃坊はこの西城の中にあり、この地が貿易の中心となっていた。その役割は地名にも現れる。例えば、西城には九つの門があり、東南門である航海門が海外へ向かう商船の港となっていた。南側には四つの門があり、素波門・朝宗門・善利門・阜財門と言ったが、朝宗とは万海朝宗の意味であり、外国商船の停泊地であることを表していた。善利・阜財からも商工業が繁栄した地区だと推測できる(地図1参照)⁽¹³⁾。

至元13年(1276)臨安(杭州)の南宋皇帝が降伏して以降、福建から広東の沿岸地域は、南宋の残存勢力とモンゴル軍の戦闘の舞台となった。モンゴルは泉州の有力な貿易商である蒲寿庚を取り込んで水軍力を強化した。張弘範・李恒らが率いたモンゴル軍は、広州湾の厓山(現在の新安県)において南宋の亡命政府軍を追い詰め壊滅させた。これをもって南宋は完全に滅亡したとされる⁽¹⁴⁾。厓山の戦場附近は、現在、宋元厓門海戦文化旅游区として、明代創建の慈元廟を基に整備されている。1995年には厓山祠が再建され、2005年さらに整備が進められ、宋末三傑(張世傑・陸秀夫・文天祥)がまつられた。2016年の訪問時、宋元交替をしのばせるものは何一つ残っていなかったが、現在の銀州湖(崖門水道)を見下ろし厓山の戦いを思うと感慨深く感じられた。

宋元交替を目の当たりにした広州はどのように推移したのか、関わる地方行政機関はどのよ



地図 1

※ 王 2006A:208 所載「宋代広州城及南海西廟図」を一部改めた。

うなものが存在したのか、簡単に見ていこう。『元史』巻 62「地理志 5」江西等处行中書省には、
 広東道宣慰使司都元帥府。

海北広東道肅政廉訪司。

広州路(上)。唐は広州を以て嶺南五府節度五管經略使の治所と為し、又た南海郡に改め、
 又た仍りて広州と為す。宋は升して帥府と為す。元至元十三年内附し、後ち又た叛く。
 十五年之に克ち、広東道宣慰司を立て、総管府並びに録事司を立つ。元は八県を領し、
 而して懷集一県は割きて賀州に属す。戸一十七万二千二百一十六、口一百二万一千二百
 九十六。司一・県七を領す。録事司(至元十六年に立ち、州の東城・西城・子城並びに
 番禺・南海二県の在城の民戸を以て之に隸せしむ)。県七は、南海(中)、番禺(下、南
 海と俱に倚郭たり)、東莞(中)、増城(中)、香山(下)、新会(下)、清遠⁽¹⁵⁾。

とある。宣慰使司都元帥府は、地方の軍民の事をつかさどる宣慰司が辺境の軍旅を兼ねる際に
 都元帥府をおびたものである。広東道以外では、「大理金齒等处宣慰使司都元帥府」と雲南南
 部の「蒙慶等处宣慰使司都元帥府」が置かれた⁽¹⁶⁾。至元末から大徳初にかけて、烏思蔵納里
 速古児孫等三路宣慰使司都元帥府・土蕃等路宣慰使司都元帥府・福建道宣慰使司都元帥府・広
 西両江道宣慰使司都元帥府が置かれ⁽¹⁷⁾、また、元末には山東・淮東・湖南など各地にも慰使
 司都元帥府が設置された⁽¹⁸⁾ことに照らしてみると、辺境における軍事拠点としての性格を持
 ち合わせていたことがわかる。嶺南地域は、江西行省の中心たる龍興路(初め隆興路、現在の
 南昌市)から遠く離れており、それを束ねる役目に加え、東南アジア方面への前線の役割が期
 待されていたことが想定される。建物は南宋の經略使衙門が利用された⁽¹⁹⁾。

次に見える海北広東道肅政廉訪司は、海北広東道提刑按察司から至元 28 年(1291)に名前

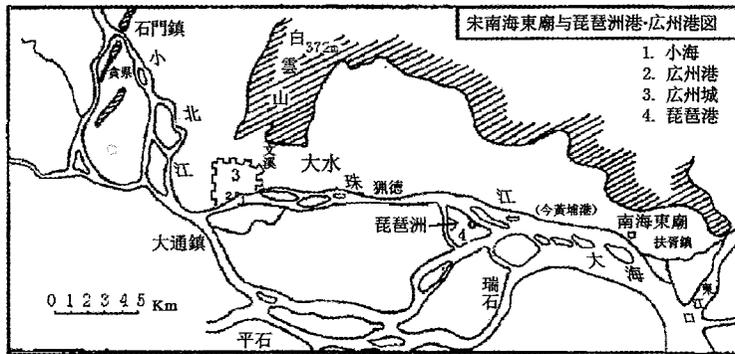
を変えた監察機関であり、行政（中書省系統）とは別のルート（御史台系統）で地方と中央を繋ぐ重要な役割を果たした。廉訪司の職務は地方官の監察が主であったが、保举（推挙）や廟学管理・出版などの文化的な役割に加え、農業・養蚕・水利の振興や貧民の救済など、地方・中央をこえた多様な役割を演じていた⁽²⁰⁾。広州に廉訪司の役所が置かれたことから、広州路が杭州路や龍興路などに次ぐ南方の支配拠点となっていたことも読み取れる。

さらに、本記事によれば、杭州の陥落と同じ至元13年（1276）に一旦モンゴル側に附いたが、広東道宣慰司や広州路総管府の設立は15年以降になったという。海北広東道提刑按察司の設立も同じ至元15年であった⁽²¹⁾。この背景には南宋滅亡前の興亡が関係していた。広州城でキーとなる人物は南宋末の士人張鎮孫であった。彼の動向については、『宋史』『元史』では断片的にしかわからない。しかし、明の黄佐『広州人物伝』には詳細な記述があり⁽²²⁾、その後の史書に伝えられる。

張鎮孫は広州南海県の人で、南宋度宗咸淳七年（1271）の状元（宋代嶺南出身で唯一の状元及第者）であった。徳祐元年（＝至元12, 1275）、時の宰相賈似道の反感を買い、婺州（現在の金華市）の通判におとされた。まもなく、モンゴル軍が臨安に迫ると、城を捨てて故郷へ帰ったため罷免させられた。翌年、亡命政府の趙昀（端宗）が即位したのに呼応し、広州附近の海上勢力を集結して広州都統凌震と連携をはかり、モンゴル軍に対抗した。景炎2年（＝至元14）4月には、すでにモンゴル治下にあった広州を奪還し⁽²³⁾、龍図閣待制・広東制置使兼経略按撫の称号を端宗から賜っている。しかし、モンゴル側の右丞相の塔出・哈刺解らが戦いを挑み、同年中に投降することとなった⁽²⁴⁾。至元15年、大都に送られる途中、大庾嶺（現在の江西省大余県）で自害する。同様にモンゴルに対抗した文天祥が、彼を悼んで詩を残している⁽²⁵⁾。南宋の滅亡とされる厓山の戦いは、翌年広州湾で起こったが、城内については至元15年（1278）の時点で再びモンゴル勢力下に入ったことがわかる。広州にとっての元朝の支配は、至正28年（1368）4月に大明兵が入城するまで⁽²⁶⁾、ほぼ90年間続いたのであった。

第2節 元代の広州と歴代広州の南海祭祀活動

宋代貿易で賑わった広州は、元代に入ってどう姿を変えていくのか。そのことを考える前に、次章で南海廟の祭祀を考えていくにあたり、宋代、西城に設けられた南海西廟（以下、西廟）の存在について、ここで説明しておきたい。元来の南海廟の場所とは異なる地点に、分廟としては規模の大きい南海廟が築かれたのである。そもそも、広州における本廟として現在にも続く南海廟が建設されたのは、隋の開皇年間に遡る。文帝は、開皇14年（594）に五岳四瀆四海の一つであった南海に対して、他の岳瀆と同様に祠廟を設ける命令を出した⁽²⁷⁾。この時、広州の外港であった珠江沿いの港（現在の広州市黄埔区廟頭村、旧称は扶胥村）附近に南海廟が建設されたのである（地図2参照）。



地図 2

※ 王 2006A:200 所載「宋南海東廟与琵琶洲港・広州地図」の文字を日本語に改めた。

唐の玄宗天宝 10 年（751）には、やはり、他の海神と足並みをそろえて、南海神には広利王の封号が賜与された⁽²⁸⁾。岳瀆の祭祀事情は廟が置かれた地方の状況によって多少の違いはあったが、封号については、唐の玄宗以降はほぼ一様に賜与された。紙幅の都合上、歴代の岳瀆祭祀活動を概観するため、表 1 岳瀆海瀆廟の所在地・封号一覧を作製した⁽²⁹⁾。本表からは、広州における南海祭祀が、国家祭祀の枠組みで歴代行われてきたことがわかる。

では、その中で、宋代にもう一つの西廟が建設された理由は何だろうか。王元林は、従来の南海廟（以下、西廟に対しては東廟とする）の不利な側面を指摘した上で、西廟が建設された背景を説明する。東廟での祭祀へは城内から船で向かうが、夏の祭祀時期の風向きや台風などの天候不良は官員を悩ませた。そもそも、州城から 30 キロ近くも離れていたことは、城内か

表 1 岳瀆海瀆廟の所在地・封号一覧

名称	対象	廟の所在地（遼宋金元）	現存	封号例（唐）	封号例（宋）	封号例（元）
東岳	泰山	兗州→泰安州泰安	○	天齊王（開元 13）	仁聖天齊帝（大中祥符 4）	齊天大生仁聖帝（至元 28）
南岳	衡山	衡州→衡州路	○	司天王（天宝 5）	司天昭聖帝（大中祥符 4）	司天大化昭聖帝（至元 28）
西岳	華山	華州→奉元路華州華陰	○	金天王（先天）	順聖金天帝（大中祥符 4）	金天大利順聖帝（至元 28）
北岳	恒山	定州→保定路曲陽	○	安天王（天宝 5）	安天元聖帝（大中祥符 4）	安天大貞玄聖帝（至元 28）
中岳	嵩山	河南府→河南府路登封	○	中天王（垂拱 4）	崇聖中天帝（大中祥符 4）	中天大寧崇聖帝（至元 28）
南瀆	長江	成都	×	広源公（天宝 6）	広源王（康定 2）	広源順清王（至元 28）
西瀆	黄河	河中府	×	靈源公（天宝 6）	靈源王（康定 2）	靈源弘清王（至元 28）
東瀆	淮水	唐州→南陽	×	長源公（天宝 6）	長源王（康定 2）	長源溥清王（至元 28）
北瀆	濟水	孟州→懷孟（懷慶）路濟源	○	清源公（天宝 6）	清源王（康定 2）	清源善清王（至元 28）
東鎮	沂山	青州→益都路濰州	○	東安公（天宝）	東安王（政和 3）	元徳東安王（大徳 2）
南鎮	会稽山	越州→紹興路	×	永興公（天宝 6）	永清王（政和）	昭徳順応王（大徳 2）
西鎮	呉山	隴州	×	成徳公（天宝）	成徳王（元豊 8）	成徳永靖王（大徳 2）
北鎮	医巫閭山	広寧府→広寧府路	○	広寧公（天宝 6）	広寧王（政和）	貞徳広寧王（大徳 2）
中鎮	霍山	晋州→晋寧路霍州	△	応聖公（天宝 6）	応靈王（政和）	崇徳応靈王（大徳 2）
東海		萊州→益都路萊州	×	広徳王（天宝 10）	淵聖広徳王（康定 2）	広徳靈会王（至元 28）
南海		広州→広州路	○	広利王（天宝 10）	洪聖広利王（康定 2）	広利靈孚王（至元 28）
西海		隴州	×	広潤王（天宝 10）	通聖広潤王（康定 2）	広潤靈通王（至元 28）
北海		孟州→懷孟（懷慶）路濟源	○	広沢王（天宝 10）	沖聖広沢王（康定 2）	広沢靈佑王（至元 28）

ら向かう人々にとっては不便きわまりないところだったのである⁽³⁰⁾。

西廟の創建については諸説あり、また、場所の移動もあったと推測されている。南宋や明清時代の西廟は、現在の文昌南路と下九路が交わる広州十甫假日酒店のあたりにあったことが確実であるが、王元林はそれとは別に、広南東路経略使程師孟が西城を修築した熙寧4年（1071）から5年にかけて、南海西廟が建てられたと考える。慶暦元年（1041）以来反乱を繰り返した儂智高らによる皇祐4年（1052）の広州攻撃がきっかけとなり、それを撃退した神威を称えて、翌年、南海神は「洪聖広利昭順王」の称号を得た。程師孟はそれを受け、地方の守護神として南海神の祠廟を準備したのである。その場所は、市舶司からほど近い、当時の州城（子城）の西南隅であった（地図1参照）。貿易・商業関係施設が集中し、それに従事するアラブ人や漢人が居住する地区に西廟が建てられたことになる。邪悪なものから城を守護する神は、同時に、航海安全を願う元来の信仰対象ともなり、西廟は地域の民衆たちの参拝場所となっていた⁽³¹⁾。

東西の南海祠廟は、宋元交替の中でともに破壊されたが、西廟の復興の方が早かったと考えられる。次節で見ていくように、元至元29年（1292）の南海廟祭祀が西廟で行われたのは東廟が荒廃していたままだったからである。おそらく、州城の復興と並行して、西廟の修築も進められたのであろう。国家祭祀を行う施設として東廟、つまり歴代用いられてきた州城東外のもとの場所に南海廟が修築・再建されたのは、その後のことだった。2015年12月に筆者が訪れると、祠廟附近に「南海神廟站」という地下鉄駅が建設中であつたが、現在の交通を以てしても小一時間バスに揺られる距離の場所に改めて祠廟が立てられた経緯については、次章で詳細に考えていきたい。

元初の広州に話をもどそう。宋代の貿易による繁栄は、宋元交替の中で一旦破壊されたようである。その復興は前節で見たように至元15年から始まった。広州路総管府や城内を治める録事司が設置されたことで、基本的な地方行政組織が整備されたと考えられる⁽³²⁾。至元20年代前半は、江南の多くの都市と同じく復興の時期にあたっていた。『大徳南海志』によれば、至元27年の広州の戸数は17万2284戸（『元史』では17万216戸）とされており、淳熙年間の18万5713戸から数字の上では1万戸以上の減少が見られる。しかし、至元30年には塩課も設定されており⁽³³⁾、同年上路に格上げされた背景には⁽³⁴⁾、経済の回復や統治の安定があつたと推測される⁽³⁵⁾。

海外貿易港としての役割が回復していくのと並行して、広州はいくつか、新たな特徴をもつようになっていった。まず、東南アジアへの前線基地としての役割である。『元史』巻11「世祖本紀8」には、至元18年（1281）11月の記事として、

己巳、軍器監に勅して兵仗を給して高麗沿海等の郡に付す。奉使占城の孟慶元・孫勝夫並びに広州宣慰使となり、兼ねて出征調度を領す⁽³⁶⁾。

とあり、占城・緬国の支配やその後の遠征の拠点がまさに広州であったことがわかる。孟慶元・孫勝夫は前年に占城を招討使として訪れている⁽³⁷⁾。孟慶元の広州宣慰使（広東道宣慰司）就任後の至元19年には、早くも占城が背いたことで、占城行省の官が広州から兵を引き連れて遠征したことがわかる⁽³⁸⁾。このような広州の役割は、商業的な側面だけでなく、政治的にも軍事的側面でも、広州が海上に開けた窓口としての役割を演じていたことを表している。

次に、唐末から両宋を通じて、多くの華北人士が広東に移り住む現象が見られ、広州はその受け皿の用意を迫られたという側面が指摘できる。森田によれば、特に南宋期、冗官問題の深刻化やベトナムとの関係緩和に加え、差遣制度の改変による摂官枠の削減、そして南渡による北人官員の嶺南流寓などの理由により、嶺南にとどまることを希望する人々が出現し、そのなかの貧窮者を救済する広恩館の設置がみられたという⁽³⁹⁾。人々の移住は都市の繁栄を生み出すとともに、様々な社会問題の火種にもなっていったと思われる。元代の広州についても、同様の研究が今後の課題となるだろう。

一方、嶺南という地域が古くから持つ地域的な特徴も、また元代の広州に影響した。『元史』には、近隣での反乱勢力が広州に迫る事件が何度か記録されている。まず、元初の混乱が覚めやらぬ至元20年（1283）には、

広州新会県の林桂方・趙良鈴等衆を聚め、偽りに羅平国を号し、延康の年号を称するに、官軍之を擒え、伏誅せられ、余党も悉く平らぐ⁽⁴⁰⁾。

と、宋の再興を謀った反乱が起こった。畚賊（ヤオ族の一派）の反乱が広州に及ぶこともあった⁽⁴¹⁾。宋代には貿易の利益を狙って匪賊が侵入したことがあり、元の反乱でも都市の繁栄が反乱勢力を引きつけた可能性がある。14世紀に入ってから、例えば泰定元年（1324）11月に反乱の記事が見え⁽⁴²⁾、大都の朝廷と離れた地域的な特徴を示していると言えよう。また、嶺南はモンゴル諸王の配流先に指定されたという記事もみえる⁽⁴³⁾。このような広州の特徴を見ていくと、貿易港としての豊かなイメージの一方で、大都から離れた南方の地方都市として広州が存在したことがわかるのである。『大徳南海志』巻7「物産」には、

広東南は大海に迎して、諸蕃を控引し、西は牂牁に通じて、巴蜀に接連し、北は庾嶺に限り、東は閩甌に界す。或いは風土の宜しきに産し、或いは異国の遠きより来り、皆な広州に聚まる⁽⁴⁴⁾。

とある。広州に集まる物産の豊かさを表すための記事ではあるが、奇しくも広州の地理的位置づけを端的に示してもいるのである。

第2章 元代の南海廟とその位置づけ

第1節 南海廟の先行研究とその議論

前章で挙げた元代における広州の特徴のいくつかは、実に、南海神祭祀の動向と直接的に、

あるいは間接的に連関している。南海廟については、「海上絲路」の世界遺産申請ともからみ、近年多くの紹介的专著がでている⁽⁴⁵⁾。それらには、写真が豊富に使用されており、文革期以降の南海廟の様相や発掘の様子をうかがうことができる。廟宇内は文革期に一部の構造や建物を残して荒廃し、石刻も多くが破壊された。1986年大規模な修復が始まり、1991年には建物の修築や破壊された石刻の収集が終了し、その後、廟周辺の整備が始められた⁽⁴⁶⁾。21世紀に入っても周辺の発掘や整備・保存が続けられている。2015年に筆者が訪れた際には、廟の敷地内はほぼ舗装され、廟内では文物の展示が行われたり、石刻を保護する囲いが作られたりするなど、整理・保護活動が進展していた。

元代における本廟の歴史に初めて注目したのは、広州にある暨南大学の研究者たちであった。古籍研究所の王頌は、南海廟の歴史研究が不足していることを指摘し、隋唐から宋元にかけての南海廟祭祀について神格や称号の推移など多方面から論じ、元末紅巾軍の時代に祭祀が最も頻繁だったことを指摘した⁽⁴⁷⁾。それに対し、歴史系の王元林は、歴史地理学的な側面から、南海廟の歴史を全面的に検討して『国家祭祀与海上絲路遺跡—広州南海神廟研究』を上梓した。同書は、時代ごとに章をたててその祭祀の盛衰を論じており、本稿の前章ではその宋代部分を参照した。元代の祭祀については、ほぼ年代順に祭祀活動を解説しており、本稿でも大いに参照したが、元代の意義づけとしては、南漢兩宋の「輝煌」をうけた「萎縮」の時代だと表現した⁽⁴⁸⁾。これらの研究を通して、南海廟の研究は一気に進展した。南海廟関連文献の集成が出版されたこと⁽⁴⁹⁾ともあわせ、研究の利便性が大幅に向上したと言える。

しかし、王元林の著作は、海上シルクロードの貿易港としての広州を強調する立場から、南海廟の役割のうち航海神・地方神としての側面をより詳細に述べざるを得なくなっている⁽⁵⁰⁾。そのため、元代の国家祭祀の側面について当然言及はするものの、その意義について十分に検証されているとは言えない。また、王頌の研究も元代のみを対象としたものでなく、元代における祭祀の展開については、まだ議論の余地がある。一方、宋代の南海廟祭祀については、森田の専論があり、独自の分析が行われている⁽⁵¹⁾。現存する元代広州出身者の著作は多いとは言えないが、南海廟については同時代史料としての石刻史料が豊富に存在し、その整理・公開も進展した⁽⁵²⁾。それらに加え、明清時代の地方志や金石書を参考にすることで、より詳細な検討が可能である。そこで、本章では、石刻史料を主な材料として、国家祭祀の視点を軸に元代の南海廟をめぐる活動を検討し、その位置づけを考えていきたい。

元代の国家祭祀の研究は、つとに、池内功・森田憲司らによって先鞭が付けられた。池内は世祖クビライ時代の朝廷が中国的祭祀を採用した順序とその理由を説明し、クビライが岳瀆祭祀を積極的に行ったとした⁽⁵³⁾。森田は元代の「代祀」方式の岳瀆祭祀について、初めてまとまった研究を行った⁽⁵⁴⁾。筆者は、石刻史料を主要材料として、北岳廟（河北曲陽）・濟瀆廟（河南濟源）を中心に岳瀆祭祀を分析してきた⁽⁵⁵⁾。しかし、唐代礼制の多角的な研究が、封禪を合

んだ岳瀆祭祀と政権の関係性についても視野に入れているのに比べれば⁽⁵⁶⁾、宋代の岳瀆祭祀と同じく、多くの課題を残している⁽⁵⁷⁾。そのような状況のもと、馬曉林は博士論文として系統的に元代国家祭祀の研究を行った。そこでは、南海神を含めた岳瀆祭祀についても、祭祀地点・種類⁽⁵⁸⁾・ルート・使臣などの分析が行われ、地方官全員で実施する常祀と臨時的な祭祀について詳細に考察された。南鎮廟については特に経済面の分析も行い、研究は一気に進んだといえる⁽⁵⁹⁾。これら国家祭祀の研究を通じ、岳瀆祭祀が持つ多面的な意味が徐々に明らかになってきた。しかし、それぞれの祠廟の差違については、より詳細な検討が必要である。本稿で改めて南海廟祭祀を詳細に検討するのは、元代広州の歴史的な位置づけに資するだけでなく、中国歴代の国家祭祀や礼制研究の文脈でも重要となってくると考えるからである。

第2節 国家祭祀としての南海廟祭祀と広州

では、具体的に、元代南海祠廟の祭祀活動について石刻の分析を通して考えて行きたい。まず、碑刻の内容がわかる南海廟祭祀関連碑を一覧にしたのが、表2 元代南海祭祀関連碑刻一覧である。岳鎮海瀆の18の祠廟の中で、南海廟は北岳・北瀆・北鎮と同様に、現在残された元代史料が比較的多い祠廟である。馬曉林の統計によれば、各廟宇で地方官が執り行う常祀を除き、中央政府は1294年から1368年の間に、ほぼ毎年一回以上、代祀の使者を派遣したり、何らかの理由で特定の祠廟で祭祀を行わせたり（因事專祀）している⁽⁶⁰⁾。一方、南海廟については18条の詳細な記録が残っており、表2では便宜上資料の番号を18までふった。詳細な史料が残らないが使者の名前がわかる祭祀に記号A～Dをふった。この表からは、1290年代から1350年代にわたる祭祀もしくは重建・修復の記録をみることができる。祠廟に関するその他の史料もあわせて考えると、中央政府は不断に南海祭祀の使者を派遣していることが想定される。この中で、大きな節目となるのは、至元28年（1291）の封号と、翌29年～大徳7年（1303）にかけての重建であった。大徳7年の陳大震「重建波羅廟記」（資料6）には、

（至元）二十八年，世祖皇帝加うるに靈孚の号を以てし，天使宣命を奉り，万里を馳駢して広城に至れば，官吏肅（格）〔恪〕たらざる無し⁽⁶¹⁾。

とある。至元28年は元代における岳鎮海瀆祭祀制度の本格的な確立の年であるといえ、封号を伝える史料も多く、例えば、『元史』巻76「祭祀志5」岳鎮海瀆（pp.1900-1901）には、

其の封号，至元二十八年春二月，加えて東岳に上して天齊大生仁聖帝と為す（中略）。加えて江瀆を封じて広（元）〔源〕順濟王と為し，（中略）南海を広利靈孚王とし，西海を広潤靈通王とし，北海を広沢靈祐王とす⁽⁶²⁾。

とある。五岳四瀆とともに、四海にも封号が加えられ、南海に対しては「広利王」に「靈孚」の号が加えられた。同書巻16「世祖本紀13」至元28年2月丁酉（29日）には

詔して岳・瀆・四海に封号を加え，各の官を遣わして祠に詣り告を致さしむ⁽⁶³⁾。

表2 元代南海祭祀関連碑刻一覧

	年	元号年	題名	撰者(記)	書者	篆額者	使者1	使者2, 3	出典(拓影/録文)
1	1292	至元29年	代祀南海神記	陳思善			塔不迷失	孫澄	嘉靖広州志35; 碑刻集239
2	1293	至元30年	祀南海廟記	王猷(与)	陳黃裳		鄺制宜	楊彌堅	嘉靖広州志35; 番禺県志30; 広東通志214; 碑刻集241
3	1294	至元31年	代祀南海神記	熊炎(与)			李蘭美	垂罕	嘉靖広州志35; 碑刻集243
A	1296	元貞2年	奉詔祠南海				吳全節		道園学古録25 河図仙壇之碑
4	1298	大徳2年	御祭南海神文				阿蘭赤	盧撃	嘉靖広州志35; 碑刻集245
5	1298	大徳2年	代祀南海神記	盧撃(使)			阿蘭赤	盧撃	天下同文集5; 嘉靖広州志35; 碑刻集246
6	1303	大徳7年	重建波羅廟記	陳大震	趙岳	梁時中			番禺県志30; 広東通志214; 碑刻集249
7	1303	大徳7年	祭南海神文				伯帖木兒	徐鳳	嘉靖広州志35; 碑刻集248
B	1304	大徳8年	代祀南海				焦養直		元史164 焦養直伝
8	1305	大徳9年	諭祭南海神文	劉光遠	劉光遠		賈可度	晏理帖睦遜, 盧撃	嘉靖広州志35; 番禺県志30; 広州府志103; 碑刻集253
9	1308	至大元年	祀南海王記	劉光遠(与)	劉光遠		寺奴	脱烈	番禺県志30; 広東通志214; 広州府志103 碑刻集254
C	1319	延祐6年	祠南海				趙嗣祺		道園学古録46 送趙虛一奉祠南海序
10	1320	延祐7年	代祀南海王記	忽都達兒(使)			普顔	忽都達兒	番禺県志30; 広東通志214; 碑刻集47
11	1324	泰定元年	代祀南海王記	陳性存(与?)	連文質		綽思監	畢礼亞	番禺県志30; 広東通志214; 碑刻集256
12	1327	泰定4年	代祀南海王記	呂宏道(与)			黃頭天倪	曹徳仁	広東通志214; 番禺県志30; 広州府志103; 碑刻集51
13	1334	元統2年	祝文	宋鑿					燕石集11
14	1336	至元2年	南海廟代建宝醮記	劉本(与)	葛元鼎	葛元鼎	脱火赤	蘇枢	広東通志215; 番禺県志30; 碑刻集257
15	1348	至正8年	王按彈詩	王溥化(使)			王溥化		広東通志215; 番禺県志30; 広州府志103; 碑刻集260
16	1350	至正10年	代祀南海王記	楊舟(使)	楊舟		月魯不花	楊舟	広東通志215; 番禺県志30; 広州府志103; 碑刻集55
17	1351	至正11年	頒降御香題名	安僧(使)			王教方	安僧	広東通志215; 番禺県志30; 広州府志103; 碑刻集261
D	1353	至正13年	奉旨承命取祠				倪某		秋声集9 倪元魯代祀南海序 他
18	1355	至正15年	代祀南海廟記	牛繼志(使)	黃異	黃異	三宝奴	牛繼志	広東通志215; 番禺県志30; 広州府志103; 碑刻集159

※ 出典

嘉靖広州志: 黄佐纂修『広州志』70巻(現存37巻、広東省人民政府地方志弁公室「広東省情数拠庫」ウェブサイト)(<http://121.15.254.4:1980/SunI/T/info.huizhou.gov.cn/books/obdtree/showbook.jsp?sttype=v&paths=17608&siteid=guangdong&sitename=廣東省情網>)

広東通志: 阮元等修、陳昌裔等纂『広東通志』334巻(同治3年(1864) 擬道光2年重刊本、中国地方志集成、鳳凰出版社、2010.6)

番禺県志: 李福泰修、史澄等纂『番禺県志』54巻(同治10年(1871) 刊本、中国地方志集成、上海書店出版社、2003.10)

広州府志: 戴維辰等修、史澄等纂『広州府志』163巻(光緒5年(1879) 刊本、中国地方志集成、上海書店出版社、2003.10)

道園学古録: 虞集『道園学古録』50巻(四部叢刊本)

天下同文集: 『天下同文集』50巻(四庫全書珍本5集)

燕石集: 宋鑿『燕石集』6巻(北京図書館古籍珍本叢刊92、書目文獻出版社、1987; 四庫全書珍本2集)

秋声集: 黄鎮成『秋声集』6巻(四庫全書珍本初集)

碑刻集: 黄兆輝・張菽珊編撰『南海神廟碑刻集』(民族宗教研究資料叢刊、広東人民出版社、2014.5)

とあって、封号を加えた後には、各廟に使者が派遣されたとある。しかし、同じ2月己卯（11日）にはすでに、

官を遣わし香を持ちて中岳・南海・淮瀆に詣り禱を致さしむ⁽⁶⁴⁾。

とあり、18日ほど前にも使者が送られていたことがわかる。また、それに先立つ至元26年も南海廟へ使者が遣わされたとされる⁽⁶⁵⁾。ところが、これらの使者がどこでどのような祭祀を行ったのか、史料からは不明である。一方で、封号を正式に伝える使者の到着が翌29年であることを示唆する史料が存在する。至元29年5月の資料1には、

広州南海神祠、前代使を遣わし祭を致さしむること、歳ごとに違闕すること無し。中更兵革、及ぶ違らざる者十余年なり。皇帝四海を奄有し、百神受職す。至元二十八年、詔して広利靈孚王に封じ、越えて明年、聖旨もて怯薛歹必閣赤塔不迷失・集賢院蒙古必閣赤孫澄を遣わし香を捧げて祭を致さしむ⁽⁶⁶⁾。

とあり、至元29年の代祀が前年の封号を契機としたように記録されている。さらに、資料6には、

將に正祠に寵光を致さんとするに、祠已に廢すると聞き、乃わち城西の別祠において礼を行う。同知総管府事趙勝興（中略）乃ち俸を捐じ之を修せんとするも、未だ備わらざるなり。（中略）（二）〔三〕十年、公宣慰副使に陞り、復た之を修せんとして、苟しくも合す。已にして命を被り都元帥府の事を簽し、始めて其の力を展ぶるを得⁽⁶⁷⁾。

とある。広州に到着した使者は、本廟がすたれていると聞いて、おそらく先に復興していた西廟で祭祀を執り行ったのであった。この時点で祠廟修築の方向が生まれたのには、至元26年・28年・29年と使者が連年来着したことに加え、朝廷が封号を行った影響が認められるだろう。広州路総管府の一地方官に過ぎなかった趙勝興は、自身の給与をつぎ込み本廟の修築を開始したが、思ったようにことは運ばなかった。翌年、広東道宣慰副使・簽都元帥府事へ昇進したことにより、やっと十分な修復活動を進めることができるようになったのである。

ここからわかるのは、朝廷が封号を加え使者が来着したことで、朝廷の祭祀への積極さは理解されたが、だからといってすぐに朝廷がお金を出して修復するという話にはならなかった点である。資料6には続けて、

乃わち農隙において、募材鳩工、入執宮功す。一木一石の未だ良からず、一斧一鑿の未だ精ならずは、必ず之を更え、善を尽さしむるのみ。（中略）凡そ屋一百二十五間を為し、十余年を歴して後に就す⁽⁶⁸⁾。

とあり、丁寧な修築の結果、南海廟の修復には10年の歳月を要し、その完成は、資料6が碑に彫られた大徳7年だった。

その間、朝廷の岳瀆祭祀自体にも動きがあった。至元31年、世祖クビライが逝去し成宗テムルが即位すると、その即位の詔に、

五岳四瀆は、使を遣わし祠に詣り祭を致さしめ、其れ名山大川・聖帝明王・烈士の載せて祀典に在る者は、所在の長吏、常祀するを除くの外、日を択びて祭を致す。廟宇損壊せば、官修理を為す⁽⁶⁹⁾。

という条画がつけられた。ここでは、すでに実績のある岳瀆の祭祀について、名山大川や聖帝明王・烈士の祠廟とあわせて改めて祭祀（常祀）の実施を指示しており、新たな皇帝の即位時に政策が確認されたのである。注目すべきは、祠廟の建物が傷んだり壊れたりしたら、官が修理を施すよう規定されているという点である。これは一見、朝廷が資金を支出して修築する規定のようにも読める。しかし、広州の事例をみると、費用を負担したのは中央ではなく、まず、地方官が率先して重修に着手した。そして、相応の立場を得てから資材をあつめ祠廟を修復したのである。趙勝興の行動は、総管府そして宣慰司としての任務から来ているのではあるが、最初は地方の有力者としてやるべき事だと自認したとも想定できよう。

此度の南海廟重修には、結局、10年の歳月を要した。資料6は重修を丁寧に行った結果だとするが、果たしてそれだけであろうか。至元2年華北の岳瀆廟で修復の命令が出た際には、政府から経済的な支援があった⁽⁷⁰⁾。しかし、南海廟では完全に地方官の手に任されたのである。このように祠廟を支える経済的な地盤が脆弱である点は、管理者が常住しなかった時期の南鎮廟の様相と近似している⁽⁷¹⁾。ただ、南鎮廟とは異なる特殊な状況として、西廟の存在を加味して考えなくてはならない。当地の人々は州城から至近の西廟で祈祷を行い、宋代の東廟は公的な祭祀のための祠廟という性格が強まっていた⁽⁷²⁾。そのため、西廟の修建が優先され、東廟の修復が衆人の協力を得られなかった可能性がある。10年間の修築中、朝廷からの代祀を東廟・西廟のどちらで行っていたのかについては定論がない。しかし、資料2～5によって至元30年・31年・大徳2年の祭祀の状況を見ると、「舟に乗りて祠所へ詣る」⁽⁷³⁾などの表現から東廟で祭祀を行った可能性が高いと考えられる。いずれにせよ、大徳7年の祠廟修築後、皇帝の即位や国家の大事のたびに、南海廟に派遣された使者は東廟で祭祀を行っていた。

次に、表2を用いて、南海祭祀関連の人物、つまり、祭祀の使者・参加者、その後立碑に関わった人物を整理し、森田憲司・馬暁林らによる岳瀆廟全体の検討結果⁽⁷⁴⁾と比較していく。まず、南海祭祀の使者を見ると、33人中14人が怯薛（ケシク）の肩書をもった人物（主に蒙古人）であることが判明する。岳瀆祭祀の使臣に関する規定を時間軸で見ると、中統初においては「道士を遣わし、或いは副うに漢官を以てす」⁽⁷⁵⁾とあり、道士の参与が前提となっていた。しかし、南海に使者が至るようになった至元20年代には規定が変化する。至元21年には「蒙古官及び翰林院官各の一人を遣す」⁽⁷⁶⁾という例が現れ、同28には「宜しく重臣を遣わし朕に代わりて之を祠らしめ、漢人は名儒及び道士の記事を習う者を選ぶべし」⁽⁷⁷⁾と規定された。ケシクの官が多いのは「重臣」が選ばれた結果である。一方、南鎮廟の祭祀もそうであったが、江南の岳瀆廟祭祀は至元20年代以降に確立したため、祭祀や運営への道士の関与は最

初から限られていた。これは華北の岳瀆廟と全く異なる特徴であった。

使者となった人物にその他の特徴はあるのだろうか。使者の肩書を見ると、怯薛以外の多くが集賢院もしくは翰林院の官であり、御史台や秘書監の場合も見受けられた。履歴が比較的詳細にわかる使者として、鄭制宜⁽⁷⁸⁾、呉全節⁽⁷⁹⁾、盧摯⁽⁸⁰⁾、焦養直⁽⁸¹⁾、忽都達児⁽⁸²⁾、牛繼志⁽⁸³⁾がいるが、彼らに共通するまたは特徴的な共通点はない。ただ、科挙の開始以降、忽都達児や牛繼志などトップ合格者が選ばれていることは、南海廟祭祀の重要性を表している。

また、例外的ではあるが、資料 12 及び A・C で道士が派遣されている状況が挙げられる。呉全節は南岳提点の身分で、曹徳仁は中岳廟住持提点の身分で祭祀を執り行っており、あくまでも、一般的な代祀の規定とは異なる範疇の祭祀活動だととらえられよう。さらに、南海廟に来た使者は、その他の岳瀆廟の使者と比べて文章で名高い士人が少ないこともわかる。これは、碑刻の残存の仕方にも明らかに影響しているようである。15 世紀の葉盛 (1420-1474) 撰『菖竹堂碑目』巻 5 には、現在見ることのできない南海廟碑刻の名称が列挙される (表 2 所載の碑刻は省略)。

南海神廟代祀記 朱口撰并書 大徳元年四月 (1297)

南海神廟代祀記 陳祖麟撰 天暦二年八月 (1329)

南海神廟代祀記 張策撰 至順二年五月 (1331)

南海神廟代祀記 元統三年六月 (1335)

南海王代祀記 至元六年二月 (1340)

南海神廟碑 呉文宝撰 至正新元五月 (1341)

南海廟代祀記 至正四年二月 (1345)

南海神廟代祀記 許錫撰 至正二十七年六月 (1367)⁽⁸⁴⁾

これらの碑刻は、乾隆年間の『粵東金石略』にもすでに見えず、新しい碑刻を彫るために明から清初にかけて再利用されたと考えられる。有名な士人が関与した碑刻は一般的に残されやすいが、使者の一人 (表 2 中の (使)) か、もしくは広州の地方官・教授ら (与) が撰写した南海廟の元代祭祀碑刻は、著名な関与者が不在の中で多く再利用に回されたと考えられる。

次に、祭祀に参列した人々もしくは記念の碑を立てた人物について検討したい。祭祀に参加した人は、資料の中で、「与祭」「陪祭」「祝官」という表現から判断される。しかし、碑刻上の字配りは拓影が残る二碑以外明らかでないため、碑刻上に列挙される名前が祭祀への参列者なのか立碑の関係者なのか判断が難しい。両方の場合もあるだろう。碑刻に名前が見える地方官は、三つのタイプの人物に分けられる。まずは、海北広東道肅政廉訪司の官である。文化的な任務を担う廉訪司の官は元代を通じて代祀に参与し続けた。次に、広州路・番禺県の官や儒学の官たちが挙げられる。彼らは一年に二回の常祀を主催する立場でもあった。そして、広東道宣慰使司都元帥府もしくは江西行省の官員が挙げられる。これら三つのタイプの官員が祭祀活動

に参与する理由は、先行研究ではすべて地方官僚の義務として、「使至れば必ず名を勒して行を紀し、以て故実となす」や「祀すれば必ず記有り」の前例⁽⁸⁵⁾を遵守しているものと単純に考えられていた。しかし、至元から大徳年間にかけての重建の経緯を見れば、朝廷の命令と地方の動きが密接に関係している様子が見て取れた。

また、中央の動きとの連動を想起させる資料も存在する。資料 14 には、

儒道釈官、明選隆教大師広州路僧録盧道基、明遠冲妙通真法師広州路道判章益祥。

広州路儒学学正権管学事劉光遠記并書

通真觀復凝妙法師広州路道録兼提点廟事劉道純立石⁽⁸⁶⁾

とあり、至大年間に初めて南海廟の「提点廟事」が記録された。これは、数年前に廟宇の重修が終わった結果であろう。提点廟事の劉道純は道士に間違いなく、元の中期以降に道士が廟の管理にあたるようになるのも南鎮と同様であった。また、「儒道釈官」として広州路僧録と道教の道判、そして儒学学正権管学事が挙げられている。岳瀆祭祀の一つの碑刻上に三教の地方官の名前が見える碑刻は珍しく、広州の南海廟における特徴だと言える。資料 14 は武宗カクシヤンの即位を記念した祭祀の記録である。武宗は即位以後、三教を崇拝する聖旨を立て続けに発布し、三教の統括者に高い身分を与えた。この碑刻に三教の官員が列挙される理由は、中央の三教を尊崇する時代的な雰囲気を反映している可能性もあろう。

第 3 節 元末の南海廟祭祀とその位置づけ

一般的に言って、元代は中国の伝統祭祀に、とりわけ郊祀に対して冷淡な態度をとったとされている⁽⁸⁷⁾。それに対し、岳鎮海瀆の祭祀は夙に指摘されるように熱心な実施された。岳瀆祭祀が持つ意味が、モンゴルによる漢地統治に利益があったことが想定できる。このことについて、森田健太郎は宋代を対象に重要な指摘をしている。森田は、宋朝による東海神・南海神への信仰が唐代から清代までの中で最も盛んであったことを指摘する。さらに、その後東海神や南海神への信仰が天妃信仰の影響力に及ばなくなっていく原因を、四海信仰の地理的概念の限界と、国家祭祀の枠内という地位による限界、或いは宋代において排外的な概念が植え付けられたためなのかもしれない⁽⁸⁸⁾とする。森田の言うところの地理的な概念と国家祭祀の関係は、筆者も非常に重要な問題だと考える。岳鎮海瀆の祭祀は、皇帝による祭祀の一部分として、地理的な概念を含み、“天下”を祭祀の対象とするという考えが一貫してあった。元代における南海祭祀の変容からは、どのようなことが読み取れるのであろうか。

筆者はこれまで、岳鎮海瀆廟にはいくつかの機能があったことを指摘してきた⁽⁸⁹⁾。そのうち、南海廟の祭祀に関連して三つの意義を挙げる。まず、統治の正当性を示すという意味である。南海について宋初の状況を参考にすると、

太祖湖南を平らげば、給事中李昉に命じて南岳を祭り、繼いで有司をして諸岳の神衣・冠・

劍・履を製せしめ、使を遣わして之を易う。広南平らげば、司農少卿李繼芳を遣わして南海を祭らしめ、劉鋹封する所の偽号及び宮名を除去し、易うるに一品の服を以てす⁽⁹⁰⁾。とある。ここからは、広南を平定したのを機に南海に使者を派遣し、前の支配者が封じた名号を取り去っているのがわかる。統治と岳瀆祭祀が密接に結びついている様子がうかがえる。臨安が陥落し江南が元の支配を受け始めた至元13年2月、朝廷は祠廟の保護を命じ⁽⁹¹⁾、5月には平宋を記念した代祀が岳瀆へ派遣された⁽⁹²⁾が、南海廟へも使者が派遣されたかは明らかでなく、その前後の戦乱の中で廟宇も荒廃してしまった。前節で挙げた至元26年の祭祀が南海へ派遣された最初の使者であった可能性もある。しかし、28年に一旦制度が確立してからは、表2にあるように、継続して使者が送られた。至元28年の加封号の聖旨には、

名山大川は、国の秩祀なり。今岳瀆四海は皆な封宇の内に在り、民物阜康にして、時惟に神休、而して封号の未だ加えざるは、以て靈貺を昭荅する無し⁽⁹³⁾。

とあって、祭祀対象の岳瀆海瀆が領域に入ったことが封号の前提として挙げられている。南海廟を祀ることも、その地を支配する王朝として当然の行いであった。表3 宋金元岳瀆祭祀地点一覧からは、宋金時代、各政権の領域外にある岳瀆を仮に領域内の別岳瀆廟や京師で祭祀していたのに対し、元代には全ての岳廟が領域内にあったことが明らかになる。つまり、岳瀆海瀆がすべて領域に入った元代において、18の岳瀆海瀆祭祀をふさわしい場所で行うことは、政権として必要十分な政策だったのである⁽⁹⁴⁾。

次に、外患から守る神としての岳瀆廟の役割である。五代後漢時代の混乱した時代や北宋末・

表3 宋金元岳瀆祭祀地点一覧

名称	対象	北宋	金	南宋	元
東岳	泰山	兗州	泰安州	京師陪祀	泰安州泰安
南岳	衡山	衡州	河南府	衡州	衡州路
西岳	華山	華州	華州	京師陪祀	奉元路華州華陰
北岳	恒山	定州	定州	京師陪祀	保定路曲陽
中岳	嵩山	河南府	河南府	京師陪祀	河南府路登封
南瀆	長江	成都	萊州	成都	成都
西瀆	黄河	河中府	河中府	京師陪祀	河中府
東瀆	淮水	唐州	唐州	京師陪祀	南陽
北瀆	濟水	孟州	孟州	京師陪祀	懷孟(懷慶)路濟源
東鎮	沂山	沂州	益都府	京師陪祀	益都路濰州
南鎮	会稽山	越州	河南府	越州	紹興路
西鎮	吳山	隴州	隴州	京師陪祀	隴州
北鎮	医巫閭山	定州	広寧府	京師陪祀	広寧府路
中鎮	霍山	晋州	平陽府	京師陪祀	晋寧路霍州
東海		萊州	萊州	明州	益都路萊州
南海		広州	萊州	広州	広州路
西海		河中府	河中府	京師陪祀	隴州
北海		孟州	孟州	京師陪祀	懷孟(懷慶)路濟源

金末の済瀆祭祀は、国家の基盤の揺るぎなきを祈る大事な対象であった⁽⁹⁵⁾。北宋末宣和6年(1116)や金末正大5年(1228)の祭祀は王朝末の混乱期に、外敵から朝廷を守るための祈祷の対象となっていた。南海廟については、方臘の乱に対する南海廟祭祀も地域を守る役割を担っていたことの証しであった。

そして、もう一つの意義としては、見せる祭祀としての意味である。乙坂智子によれば、古代から宋代に到るまで、時代の変化によって国家祭祀の意義にも変化が生じ、民衆に国家の行事を見せる意義がますます重要になっていった。例えば、宋代に郊祀を行う際、朝廷は開封で郊祀を行い民衆に皇帝の威信を見せることを意図していた⁽⁹⁶⁾。乙坂は元代の遊皇城の祭礼も民衆や漢人知識人に見せる意味を持ったとしている⁽⁹⁷⁾。歴代王朝、とりわけ、元代に岳瀆祭祀が実施されたことも、遊皇城と同じく地方の民衆に政府の威信を見せる意味があったと考える。馬曉林は Valerie Hansen と Robert Hymes の考え方⁽⁹⁸⁾をもとに岳鎮海瀆の祭祀を以下のように分析した。毎年一回の代祀は、祠廟の所在地にとって毎年朝廷の使臣たちを接待することになり、接待役にせよ祭祀自体に参加するにせよ、壮大な儀式を挙行しなければならない。使者を迎える儀式も神を祀る儀式も皇帝の至高たる存在感を明らかにし、中央と地方の統治秩序を表した。常祀についても、毎年一度地方長官が部下たちを引き連れて祭祀を行うことが、在地民衆の意識の中で朝廷の権威を強めた⁽⁹⁹⁾。さらに、祭祀の使者は往々にして地方視察の任務を帯びており、儒者を中心とした後期の代祀使者は途上に故郷に立ち寄ってもいた。これは人材を推薦する一方策ともなり、儒者としての孝養を示す意義も持ち合わせた⁽¹⁰⁰⁾。ここから岳瀆祭祀が漢地統治の一手段として展開された点も併せて指摘できる。

重修完成以後、軌道に乗った元代南海廟の祭祀は元末にかけて新たな展開を迎える。先行研究ではすでに、元末の南海廟祭祀が盛んであったことが指摘されているが、その意味をここにまとめた岳瀆祭祀の意義に照らして改めて考えていく。馬曉林によれば、後至元・至正年間(1335-1368)の代祀の記録をみると、至正13年(1353)以前はほぼ毎年祭祀の記録がみられるが、それ以降は三度しか見られないという⁽¹⁰¹⁾。至正15年の資料18には、

南海廟は海北の壩に在り、京師を去ること且く万里、江領を經渉し、凡そ四たび月を越え、始めて広の駅に達す。(中略)是より先、淮寇乱を構え、道途梗塞し、使節通うこと罕なし⁽¹⁰²⁾。

とあり、紅巾の乱が起こる前後、代祀への使者の派遣は困難な状況であった。南海廟への使者は、時期によってルートが決まっており、中岳・淮瀆・済瀆・北海・南岳・南海・南鎮が一つの路線だった時期もあるが、元末には、中岳・淮瀆・南岳・南海が一路線とされた⁽¹⁰³⁾。紅巾の乱が起こる以前の至正10年(資料16)・11年(資料17)の代祀は50日ほどで使者が広州に到着している⁽¹⁰⁴⁾。ここで4ヶ月を要したところからは、道中がいかに厳しい状況だったか察することができる。広州においても、至正21年(1361)に江南行台侍御史の八撒刺不花が

廉訪使・副使を陥れて殺害する事件が起こり、翌年には江西行省平章政事の朵列不花が広州に省を分けたり八撒刺不花が捕らえて殺されたりするなど⁽¹⁰⁵⁾、政情が混乱していた。

そんな中、『析津志輯佚』には、

五岳四瀆五鎮四海・名山大川は、上御香を降し、文翰清望の臣を用て、歳ごとに馳駢して彼に至り、代祀行礼せしむ。比年、南海・南鎮は旧に依りて祝香して使を遣わし、海道より彼に就きて祭を致すを除き、其の余の十七処は合祭す⁽¹⁰⁶⁾。

とあり、いずれかの時点で運河・陸路の使用を諦め、海道を通して南海・南鎮に赴くようになったことがわかる。南鎮廟は当時、張士誠の支配下にあったため、海道により祭祀が可能だったのは、張士誠が元朝に帰順していた至正17年～23年の期間だと考えられる。一方、浙東沿岸部を支配していた方国珍は、至正26年に朱元璋に降伏するまで、元朝へ叛服を繰り返していた。元朝に協力して南海廟への使者を手助けした可能性はあるが、資料的な裏付けは難しい。

そして、さらに驚くべきは、葉盛『菴竹堂碑目』に見えた至正27年6月の許錫撰「南海神廟代祀記」の存在である。年代に書き間違いがなければ、朱元璋軍が広州に到る前年の出来事で、国家存亡の危機に際して南海廟祭祀が実施されていたことになる。もし、この代祀が事実で無かったとしても、至正10年代～20年代にかけて5度の祭祀活動が史料から読み取れる。ここからは、江南が混乱した状況の下、中央政府は継続的に南海廟に使者を派遣する努力をしていたことが明らかとなる。

元末まで岳瀆祭祀を行うことで外敵から王朝を保つことを期待した人々が、北宋末や金末と同じように皇帝の周囲にも居た。特に南海廟は、岳鎮海瀆の中での最南端に位置し、その支配を意味する重要な祠廟であった。だからこそ、海道をも用いた祭祀が企図されたのである。広州の人々にとって、元朝の使者を迎えて一緒に祭祀を挙行し、それを記念して石碑を立てるという行為は、ある意味、安定と繁栄の象徴だと感じられたに違いない。元末に立てられた南海廟の祭祀碑には、多くの祭祀参加者や立碑関係者の名前が見え、彼らの泰平への祈りなど当時の様相を丸ごと伝えてくれる重要な史料だと言えるのである。

おわりに

本稿では、元代の広州について概観し、その中で、南海廟祭祀を取り上げて元代広州の政治的・社会的側面を描き出した。その結果、広州の貿易都市としての位置づけに止まらず、支配領域の南端としての理念的な重要性から、元末に到るまで熱心に国家祭祀が実施されたことが明らかになった。また、元代の南海廟の祭祀は、貿易港としての役割のみに照らせば、「萎縮」という表現になるかもしれないが、国家祭祀の文脈からみれば、元代は漢地を統一した王朝における祭祀活動が華やかな時代であったことがわかった。

ただ、今回の検討を通じて、大小様々な問題も浮かび上がってきた。まず、元代広州につい

元代の南海廟祭祀

ての多面的な研究の不足と、それを考える重要性についてである。また、研究史料の問題としては、主に用いた碑刻史料について、元代江南碑刻の整理・分析が不足している点も明らかで、それをもって全体的な考察を行うべき点も課題として見えてきた。南海廟だけにしても、祠廟志や遊覧題記をより活用して、他の岳鎮海瀆廟や媽祖廟とも比較した全面的な考察が可能であろう。すべて今後の課題としたい。

注

- (1) 例えば、マルコ・ポーロ 2002:145-146。
- (2) 藤本 1976:32-33。
- (3) 黄 1993；顔 2007:51-69 等。
- (4) 暨南大学古籍研究所の陳広恩教授の招きで「宋元時代の岳瀆祭祀—濟瀆廟と南海廟を中心に—」の講演を行うとともに、調査にあたって陳先生のご協力をいただいた。伏して謝意を表したい。
- (5) 「広州海上絲綢之路」で世界遺産を申請していることとも密接に関わっているのだろう。「広州海上絲綢之路史跡申報世界文化遺産 http://www.xwgd.gov.cn/xwgd/hssc/hs_index.shtml (2017.12.8 閲覧)。
- (6) 本稿で通史として参照した『簡明広東史』・『広東歴史文化名城』のうち、前者は 927 頁中で元に関わる記述は 30 頁に満たず、後者は 1 行たりとも触れていない。
- (7) 黄 1993；顔 2007 以外に、邱 2004 等がある。
- (8) 櫻井 2005A；同 2005B；同 2010；同 2012；同 2014A；同 2014B。
- (9) 『旧唐書』巻 8「玄宗本紀」開元 2 年 12 月（中華書局点校本，1975.5，p.174）。
- (10) 陳 2005: 第三章第三節「唐代広州是中国海外貿易的第一大港」；曹 2012。
- (11) 森田健 2001；同 2011。
- (12) 広州市地方志編纂委員会弁公室編『元大徳南海志残本（附輯佚）』（広州史地叢書，以下『大徳南海志』）広東人民出版社，1991.4。
- (13) 小史 1984；黄 1987；森田健 2001。
- (14) 『宋史』巻 47「瀛国公本紀・二王附」（中華書局点校本，1977.11）；『元史』巻 10「世祖本紀 7」；巻 129「李桓伝」；巻 156「張弘範伝」（中華書局点校本，1976.4）等を参照。
- (15) 『元史』巻 62「地理志 5」江西等処行中書省（p.1514）。
- (16) 『元史』巻 91「百官志 7」宣慰司（pp.2308-2309）。
- (17) 『元史』巻 17「世祖本紀 14」至元 29 年 9 月丁亥（p.367）；巻 87「百官志 3」宣政院（pp.2197-2198）；巻 62「地理志 5」江浙等処行中書省（p.1503）；湖広等処行中書省（p.1532）。
- (18) 『元史』巻 41「順帝本紀 4」至正 3 年 7 月戊寅（p.868）等。
- (19) 『大徳南海志』巻 10「廟宇」。
- (20) 肅政廉訪司の役割については、宮 2006:336-340；瞿 2006 を参照。
- (21) 『元史』巻 10「世祖本紀 7」至元 15 年 7 月甲申（pp.202-203）に「江南湖北道・嶺南広西道・福建広東道並増設提刑按察司」とある。巻 86「百官志 2」肅政廉訪司（pp.2180-2182）。
- (22) 黄佐『広州人物伝』巻 10「宋経略安撫使張公鎮孫」（嶺南遺書本，百部叢書集成，芸文印書館，1968）。次段落の多くは本伝に拠る。
- (23) 『宋史』巻 47「瀛国公本紀・二王附」（p.940）に「（益王景炎元年 5 月庚辰）広東経略使徐直諒遣梁雄飛請降于隆興帥府，乃仮雄飛招討使，使徇広州。既而直諒聞立，命權通判李性道・摧鋒軍將黄俊等拒雄飛于石門，性道不戰，俊戰敗奔広州，直諒棄城遁，また「（景炎 2 年）四月，文天祥取興国縣，広東制置使張鎮孫襲広州取之，梁雄飛等棄城走韶州」とある。
- (24) 同上書に「十一月，塔出圍広州。庚寅，張鎮孫以城降」とあり、『元史』巻 132「哈刺解伝」（p.3216）

- に「(至元14年)塔出兵攻広州, 踰月未下, 哈剌解引兵繼至, 諭宋安撫張鎮孫・侍郎譚応斗以城降」とある。
- (25) 『元史』卷10「世祖本紀7」至元15年4月辛未(p.200)には「広州張鎮孫叛, 犯広州, 守将(張)〔梁〕雄飛棄城走, 出兵臨之, 鎮孫乞降, 命遣鎮孫及其妻赴京師」とある。
- (26) 『元史』卷47「順帝本紀10」至正28年4月戊申(p.984)に「大明兵取広州路, 又取嵩・陝・汝等州」とある。
- (27) 『隋書』卷7「礼儀志2」封禪(中華書局点校本, 1973.8, p.140)に「開皇十四年閏十月, 詔東鎮沂山, 南鎮会稽山, 北鎮医無閭山, 冀州鎮霍山, 並就山立祠。東海於会稽県界, 南海於南海鎮南, 並近海立祠。及四瀆・呉山, 並取側巫一人, 主知灑掃, 並命多蒔松柏。其霍山, 零祀日遣使就焉」とある。
- (28) 『旧唐書』卷24「礼儀志4」(p.934)に「十載正月, 四海並封为王。遣国子祭酒嗣吳王祗祭東岳天齐王(中略), 義王府長史張九章祭南海広利王(後略)」とある。
- (29) 『隋書』『旧唐書』『宋史』『元史』及び馬2012:157-169をもとに筆者作製。
- (30) 王2006A; 王2006B:197-203(第6節「両宋南海神東・西廟与広州海上絲路」一, 南海東廟与扶胥港・琵琶洲港)。
- (31) 王2006B:203-209。
- (32) 『大徳南海志』卷10「廩字」によれば, 総管府衙門は宋代の提挙常平茶塩司の衙門を利用した。
- (33) 『大徳南海志』卷6「塩課」に「宋設立塩城一十七処, 自帰附後, 起廢合併不一。至元三十年止設一十四処, 初定額弁塩」とある。『元史』卷94「食貨志2」塩法(pp.2386-2393)を参照。
- (34) 『元史』卷17「世祖本紀14」至元30年正月甲戌(p.370)に「陞広州為上路総管府」とある。
- (35) 『大徳南海志』卷6「戸口」には「大徳八年報数, 戸一十八万八百七十三, 南人戸一十八万三百二十三, 北人戸五百五十」とある。
- (36) 『元史』卷11「世祖本紀8」至元18年11月己巳(p.235)に「勅軍器監給兵仗付高麗沿海等郡。奉使占城孟慶元・孫勝夫並為広州宣慰使, 兼領出征調度」とある。
- (37) 『元史』卷210「外夷伝3・占城伝」(p.4660)に「十六年十二月, 遣兵部侍郎教化的・総管孟慶元・万戸孫勝夫与唆都等使占城, 諭其王入朝。十七年二月, 占城国王保宝旦拏囉耶叩南諫占把地囉耶遣使貢方物・奉表降。十九年十月, 朝廷以占城国王李由補刺者吾曩歳遣使來朝, 称臣内属, 遂命(左)〔右〕丞唆都等即其地立省以撫安之」とある。
- (38) 同上書(p.4661)に「(十九年)十一月, 占城行省官率兵自広州航海至占城港」とある。
- (39) 森田2011参照。
- (40) 『元史』卷12「世祖本紀9」至元20年3月癸酉(p.252)に「広州新会県林桂方・趙良鈐等聚衆, 偽号羅平国, 称延康年号, 官軍擒之, 伏誅, 余党悉平」とある。
- (41) 『元史』卷16「世祖本紀13」至元27年6月丙子(p.338)。植松1984参照。
- (42) 『元史』卷29「泰定帝本紀」泰定帝元年11月丁巳(p.640)に「広州路新会県民汎長弟作乱, 広東副元帥烏馬兒率兵捕之」とある。
- (43) 『元史』卷35「文宗本紀4」天曆2年庚午(p.778)に「諸王徹徹秃・沙哥坐妄言不道, 詔安置徹徹秃広州, 沙哥雷州」とある。
- (44) 『大徳南海志』卷7「物産」に「広東南辺大海, 控引諸蕃, 西通牂牁, 接連巴蜀, 北限庾嶺, 東界閩甌。或産于風土之宜, 或来自異国之遠, 皆聚于広州」とある。
- (45) 黄2005, 陳2013, 程2015等。
- (46) 広州市文物管理委員会撰「重修南海神廟碑記」・「重修南海神廟捐款芳名碑記」(1991年)。陳2013:132-133; 黄2014:209-214。
- (47) 王元2005。
- (48) 王2006B。王元林は2002年以降, 広州市哲学社会科学發展“十五”企画課題の一つとして本研究を開始した。本書の刊行後, 国家哲学社会科学基金“国家正祀与地方民間信仰互動研究”でも, 南海廟の研究を継続している(王2016)。

元代の南海廟祭祀

- (49) 広州市 2008。
- (50) 航海神・地方神としての側面を強調する見方については、牟 2013 がすでに批判し、国家祭祀の側面を強調している。馮 2014 も、南海廟祭祀が階層によって別の意味をもつことを指摘した。
- (51) 森田 2004。
- (52) 洗 2006；黄 2014 等。
- (53) 池内 1991。
- (54) 森田憲 2001。
- (55) 注 (8) に同じ。
- (56) 雷 2004；同 2009。
- (57) 宋代の国家祭祀研究は、東岳廟や南海廟の専論が若干見られるにすぎない（金井 1987；水越 2003；森田 2004；劉 2008 等）。
- (58) 馬曉林は、祭祀を「常祀」「代祀」「因事專祀」に分類して考察する。本稿では中央から使者を派遣して現地で祀る行為をすべて便宜的に「代祀」と呼んでいる。
- (59) 馬 2011A；同 2011B；同 2011C は、博士論文である同 2012 の一部である。
- (60) 馬 2012:160。
- (61) 原文は「二十八年，世祖皇帝加以靈孚之号，天使奉宣命，馳馭万里至広城，官吏无不肅（格）〔恪〕」。
- (62) 原文は「其封号，至元二十八年春二月，加上東岳為天齊大生仁聖帝（中略）。加封江瀆為広（元）〔源〕順濟王，（中略）南海広利靈孚王，西海広潤靈通王，北海広沢靈祐王」。『大元聖政国朝典章』（故宮博物院蔵元刻本，1976 景印，以下『元典章』と略）卷 3「聖政 2・崇祭祀」にも、「至元二十八年二月，欽奉皇帝聖旨，朕惟，名山大川，国之秩祀。今岳瀆四海皆在封字之内，民物阜康，時惟神休，而封号未加，無以昭答靈贖。可加上東岳為天齊大生仁聖帝（中略）。加封江瀆為広源順濟王（中略）南海，広利靈孚王，西海，広潤靈通王，北海，広沢靈祐王。仍告遣官，詣神致告，以称朕敬恭明神之意。主者施行」とある。
- (63) 原文は「詔加岳・瀆・四海封号，各遣官詣祠致告」。
- (64) 原文は「遣官持香詣中岳・南海・淮瀆致禱」。黄佐『嘉靖広州志』卷 25「礼楽」には、「至元二十八年，遣道士張留孫，加封号」とある。
- (65) 『元史』卷 15「世祖本紀 12」至元 26 年正月辛丑（p.319）に「遣使代祀岳・瀆・后土・東南海」とある。「世祖本紀」によると，至元年間の代祀は，岳瀆のみ→岳瀆・后土→岳瀆・后土・東海と対象が増え，ここで初めて南海が加わった。
- (66) 陳思善「代祀南海神祀」（資料 1）に「広州南海神祠，前代遣使致祭，歳無違闕。中更兵革，不逮及者十余年。皇帝奄有四海，百神受職。至元二十八年，詔封広利靈孚王，越明年，聖旨遣怯薛歹必闌赤塔不迷失・集賢院蒙古必闌赤孫澄捧香致祭」とある。
- (67) 原文は「将致寵光于正祠，聞祠已廢，乃于城西別祠行礼焉。同知総管府事趙勝興（中略）乃捐俸修之，未備也。三十年，公陞宣慰副使，復修之，苟合矣。已而被命簽都元帥府事，始得展其力」。
- (68) 原文は「乃于農隙，募材鳩工，入教官功。一木一石之未良，一斧一鑿之未精，必更之，使尽善乃已。（中略）凡為屋一百二十五間，歴十余年而後就」。
- (69) 『元典章』卷 3「聖政・崇祭祀」に「至元三十一年四月，欽奉詔條内一款，五岳四瀆，遣使詣祠致祭，其名山大川・聖帝明王・烈士載在祀典者，所在長吏，除常祀外，折日致祭。廟宇損壞，官為修理。欽此」とある。
- (70) 李道謙輯『甘水仙源録』卷 5，王磐「玄門掌教宗師誠明真人道行碑銘」に「（至元二年）岳瀆廟貌罹金季兵火之余，率多摧毀。内府出元宝鈔十万緡，付師雇工繕修」とある。
- (71) 馬 2005B；同 2006:177-181。
- (72) 王元林 2006:203-209。
- (73) 王獻「祀南海廟記」（資料 2）。
- (74) 森田憲 2001；馬 2006:139-193。
- (75) 『元史』卷 76「祭祀志 5」岳鎮海瀆（p.1900）に「道遣使二人，集賢院奏遣漢官，翰林院奏遣蒙古官。

- 出璽書給駅以行。中統初，遣道士，或副以漢官」とある。
- (76) 『元史』巻13「世祖本紀10」至元21年正月甲戌(p.264)に「遣蒙古官及翰林院官各一人，祠岳瀆・后土」とある。
- (77) 『元史』巻76「祭祀志5」岳鎮海瀆(p.1900)に「至元二十八年正月，帝謂中書省臣言曰，「五岳四瀆祠事，朕宜親往，道遠不可。大臣如卿等又有國務，宜遣重臣代朕祠之，漢人選名儒及道士習祀事者」とある。至正年間に到ると，「上降御香，用文翰清望之臣，每歲馳駢至彼，代祀行礼」(熊夢祥撰，北京圖書館善本編輯『析津志輯佚』北京古籍出版社，1983.9，p.59)や「選助臣旧子・清望朝士」(至正11年「祀恒岳記」，『北園』50/77)とされる。
- (78) 『元史』巻154「鄭制宜伝」(pp.3636-3638)；袁桷『清容居士集』巻32「資徳大夫大都留守領少府監事兼武衛親軍都指揮使大都屯田事贈推忠贊治功臣銀青榮祿大夫平章政事沢国公諡忠宜鄭公行状」。
- (79) 『元史』巻202「釈老伝」(pp.4528-4529)；虞集『道園学古録』巻25「河内仙壇之碑」。
- (80) 『大明一統志』順天府・人物；顧嗣立『元詩選』盧摯伝；李修生輯箋『盧疏齋集輯存』(北京師範大学出版社，1984.8)前言。
- (81) 『元史』巻164「焦養直伝」(p.3859)。
- (82) 蕭啓慶『元代進士輯考』(中央研究院歷史語言研究所，2012.3) p.160。
- (83) 上書，p.345。
- (84) 葉盛『菴竹堂碑目』(粵雅堂叢書本)。
- (85) 安僧「頒降御香題名」(資料17)に「使至必勒名紀行，以為故実」とあり，牛繼志「代祀南海王記」(資料18)に「祀必有記」とある。
- (86) 劉光遠「祠南海王記」(資料14)。
- (87) 溝口2001:274。
- (88) 森田2004:69-70;77。
- (89) 特に櫻井2014B:384-391を参照。
- (90) 『宋史』巻102「礼志5」吉礼5・岳瀆(p.2485)に「太祖平湖南，命給事中李昉祭南岳，繼令有司製諸岳神衣・冠・劍・履，遣使易之。広南平，遣司農少卿李繼芳祭南海，除去劉鋹所封偽号及宮名，易以一品服」とある。
- (91) 『元典章』巻3「聖政2・崇祭祀」に「至元十三年二月，欽奉平定江南詔書内一款，名山大川・寺觀廟宇，并前代名人遺跡，不許毀拆」とある。
- (92) 『元史』巻9「世祖本紀6」至元13年5月乙未朔(p.182)に「以平宋，遣官告天地・祖宗於上都之近郊。遣使代祀岳瀆」とある。
- (93) 注(62)前掲『元典章』。
- (94) 櫻井2014Aを参照。
- (95) 注(89)に同じ。
- (96) 梅原1986。
- (97) 乙坂2008A；同2008B；同2017:516-520,546-549。
- (98) Hansen1990；Hymes2002。朝廷が地方の神格に封号を賜うことが地方を統治する有効な方法であったことを指摘している。
- (99) 馬2011A:193-194；馬2012:181-187。
- (100) 金1999；森田憲2001；馬2011A：195-196；馬2012：187-193。
- (101) 馬2012:173-174。
- (102) 牛繼志「代祀南海王記」(資料18)に「南海廟在海北壩，去京師且万里，經涉江領，凡四越月，始達於広之駅。(中略)先是，淮寇構乱，道途梗塞，使節罕通」とある。
- (103) 馬2012:169-172。
- (104) 楊舟「代祀南海王記」(資料16)に「即由金門指南行，並恒山梁濟，逾河，歴太室，四涉淮水，絶大江而南，上下庾嶺，夙莫馳不遑寧，五旬而後至広東」とあり，安僧「頒降御香題名」(資料17)に「渡

元代の南海廟祭祀

河浮江，踰梅閔幾万里，夙夜罔敢弗虔。三月七日，方抵南海広利靈孚王祠下」とある。

(105) 『元史』 卷46「順帝本紀9」至正21年2月 (pp.955-956) 及び22年10月壬申朔 (pp.960-961)。

(106) 『析津志輯佚』 祠廟儀祭に「五岳四瀆五鎮四海・名山大川，上降御香，用文翰清望之臣，每歲馳駢至彼，代祀行礼。比年，除南海・南鎮依旧祝香遣使，由海道就彼致祭，其余十七処合祭」とある。

参考文献

- 藤本勝次訳注『シナ・インド物語』 関西大学出版・広報部，1976.3
- 植松正「元初の畚族の叛乱について」，『香州大学一般教育研究』25，1984.3
- 小史「宋代広州西城」，『嶺南文史』1984.2，1984.7
- 梅原郁「皇帝・祭祀・首都」，中村賢二郎編『歴史のなかの都市—統都市の社会史—』 ミネルヴァ書房，1986.10
- 金井徳幸「南宋時代の市鎮と東岳廟」，『立正史学』61，1987.3
- 黄文寛「宋代広州西城与番坊考」，『嶺南文史』1987-1，1987.4
- 北京図書館金石組編『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』48-50冊，中州古籍出版社，1990（『北図』）
- Valerie Hansen, *Changing Gods in Medieval China, 1127-1276*, Princeton University Press, 1990
- 池内功「フビライ朝の祭祀について」，平成2年度（1990）科学研究費補助金総合研究（A）研究成果報告書『中国史における正統と異端』（2），1991
- 楊森主編『廣東歴史文化名城』 廣東省地図出版社，1992.6
- 黄啓臣「論元代広州的対外貿易」，『淡江史学』5，1993.6
- 蔣祖縁・方志欽主編『簡明広東史』（嶺南文庫） 廣東人民出版社，1993.7
- 陳柏堅・黄啓臣編著『広州外貿史』 広州出版社，1995.10
- 金文京（金海南）『水戸黄門漫遊考』 新人物往来社，1999.1
- 森田憲司「元朝における代祀について」，『東方宗教』98，2001.11（森田憲2001）
- 森田健太郎「劉富と辛押陀羅—北宋期広州統治の諸相—」，『史滴』23，2001.12（森田健2001）
- マルコ・ポーロ著，月村辰雄・久保田勝一本文訳『全訳マルコ・ポーロ東方見聞録—『驚異の書』fr.2810 写本—』 岩波書店，2002.3
- Robert Hymes, *Way and Byway: Taoism, Local Religion, and Models of Divinity in Sung and Modern China*, University of California, 2002
- 水越知「宋元時代の東岳廟」，『史林』86-5，2003.9
- 森田健太郎「宋朝四海信仰の実像—祠廟政策を通して—」，『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第4分冊49，2004.2
- 雷聞「道教徒馬元貞与武周革命」，『中国史研究』2004-1，2004.2
- 邱樹森「元代広州的商業文化」，『江蘇商論』2004-8，2004.8
- 櫻井智美「クビライの華北支配の一形象—懐孟地区の祭祀と教育—」，『駿台史学』124，2005.3（櫻井2005A）
- 櫻井智美「『創建開平府祭告済瀆記』考釈」，『元史論叢』10，2005.7（櫻井2005B）
- 王元林「宋元時期南海神・天妃封号与崇拜研究」，『多元視野中的中外關係史研究：中国中外關係史学会第六屆會員代表大会論文集』，2005.8（王元2005）
- 黄淼章『南海神廟』（嶺南文化知識書系） 廣東人民出版社，2005.9
- 王頌「神王祭祀：広州“南海廟”古史鈎沈」，同『西域南海史地研究』 上海古籍出版社，2005.10，（王頌2005）
- 宮紀子『モンゴル時代の出版文化』 名古屋大学出版会，2006.1
- 瞿大風・李萍「元代山西肅政廉訪司及其廉明官吏的重要作用」，『内蒙古師範大学学報（哲学社会科学版）』2006-4，2006.7
- 王元林「宋南海神東・西廟与広州海上絲路」，『海交史研究』2006-1，2006.6（王2006A）

- 王元林『国家祭祀与海上絲路遺跡—広州南海神廟研究』中華書局, 2006.8 (王 2006B)
- 洗劍民『広州碑刻集』広東高等教育出版社, 2006.12
- 櫻井智美「元代の北岳廟祭祀とその遂行者たち」, 氣賀澤保規編『中国石刻資料とその社会—北朝隋唐期を中心—』(明治大学東アジア石刻文物研究所・汲古書院), 2007.9
- 顔広文『古代広東史地考論』(嶺南学叢書) 中山大学出版社, 2007.10
- 乙坂智子「元大都の遊皇城—「与民同樂」の都市祭典—」, 今谷明編『王権と都市』思文閣出版, 2008.3 (乙坂 2008A)
- 乙坂智子「聖世呈祥の證言—元大都佛教祭典と称賀漢詩文—」, 『史境』56, 2008.3 (乙坂 2008B)
- 劉雲軍『兩宋時期東岳祭祀与信仰』(北京師範大学博士学位論文), 2008.5
- 広州市地方志弁公室編, 陳錦鴻点注『南海神廟文献匯輯』(広州史志叢書) 広州出版社, 2008.12
- 雷聞『郊廟之外: 隋唐国家祭祀与宗教』(三聯·哈佛燕京学術叢書) 生活, 讀書, 新知三聯書店, 2009.5
- 櫻井智美「元大都的東岳廟建設与祭祀」, 『元史論叢』13, 2010.9
- 森田健太郎「支配と救済—唐宋代嶺南における流落者救済の背景經濟—」, 『経済学季報』60-2, 2011.2
- 馬曉林「国家祭祀・地方統治与其推動者—論元代岳鎮海濱祭祀」, 『西南大学学报』2011-5, 2011.9, (馬 2011A)
- 馬曉林「地方社会中官方祠廟的經濟問題: 以元代会稽山南鎮廟為中心」, 『中国社会經濟史研究』2011-3, 2011.9 (馬 2011B)
- 馬曉林「元代岳鎮海濱祭祀考述」, 『中国史研究』2011-4, 2011.11 (馬 2011C)
- 櫻井智美「元至元9年「皇太子燕王嗣香碑」をめぐって」, 『駿台史学』145, 2012.3
- 馬曉林『元代国家祭祀研究』(南開大学博士学位論文), 2012.7
- 曹家齊「海外貿易与宋代広州城市文化」, 『中国港口』2012-10, 2012.10
- 陳周起『祭海古壇: 広州南海神誕』(広東非物質文化遺產叢書) 広東教育出版社, 2013.1
- 牟方君「南海神廟国家祭祀の縁起与肇始」, 『広州航海学院学報』2013-3, 2013.9
- 櫻井智美「元代的岳濱祭祀: 以濟瀆廟祭祀為中心」, 『元史論叢』14, 2014.1 (櫻井 2014A)
- 櫻井智美「モンゴル時代の濟瀆祭祀—唐代以来の岳濱祭祀の位置づけの中で—」, 『明大アジア史論集』18, 2014.3 (櫻井 2014B)
- 黄兆輝・張菽瑾編撰『南海神廟碑刻集』(民族宗教研究資料叢刊) 広東人民出版社, 2014.5
- 馮金磊・胡春梅「南海神廟对各層次群体所体现的多重意義」, 『広州航海学院学報』2014-2, 2014.6
- 王元林『国家正祀与地方民間信仰互動研究—宋以後海洋神靈的地域分布与社会空間』中国社会科学出版社, 2016.3
- 乙坂智子『迎仏鳳儀の歌—元の中国支配とチベット仏教—』白帝社, 2017.3

附 記

本稿は日本学術振興会科学研究費補助金(課題番号 15K02912)による成果の一部である。

Rituals and Ceremonies to Worship the God of Nanhai during the Yuan Dynasty of China

SAKURAI Satomi

Guangzhou was the largest trade port during the Tang Dynasty, and it remained flourishing as a trade port in the Northern Song Dynasty. In the Southern Song and Yuan Dynasties, however, historic sources mention Quanzhou as the world-class major trade port, and reference to Guangzhou decreases. Therefore, previous researches have not dealt with the history of Guangzhou during the Yuan Dynasty, and Guangzhou's place in the historical and geographical contexts remains to be investigated. Accordingly, the author intends to clarify an aspect of the social change in Guangzhou and the central government's policy toward Guangzhou during the Yuan Dynasty by analyzing rituals and ceremonies that took place at the Nanhai temple in Guangzhou.

First, the author explains several phenomena that occurred in and vicinity of Guangzhou from the end of the Southern Song Period to the Middle Yuan Period. This will shed a light on changes that took place in Guangzhou as a city and the nature of Guangzhou that characterized the time period at that time. At the end of the Song Period, Guangzhou and its vicinity was the main battle field between the Song and Yuan armies, and this interrupted the prosperity of Guangzhou, but within ten years after the Mongol-Song war Guangzhou revitalized itself. While revolts against the central government broke out in Guangzhou frequently because of the long distance from Daidu, the capital of Yuan, population increase due to immigrations from the north considerably facilitated the revitalization. Guangzhou of the Yuan Period functioned as a military base for advance to Southeast Asia, such as Champa, besides as the long-standing center of the South Sea trade.

The author goes on to examine issues related to the Nanhai temple. The temple was a subject of faith and protection by the imperial court since the Sui Period. During the Tang and Song Periods, the temple was repeatedly granted the honorary title of one of the "Divines of the Five Yue Mountains, Five Zhen Mountains, Four Seas and Four Rivers." During the Southern Song Period, the Nanhai west temple was erected, which attracted faith by the public. Yet, the state rituals and ceremonies continued taking place at the original Nanhai temple. During the Yuan Dynasty, the honorary title was granted to the

God of Nanhai in 1291, and the Nanhai temple was restored. By the end of the Yuan Dynasty, the state rituals and ceremonies at the Nanhai temple became even more frequent because rituals dedicated to the “Divines of the Five Yue Mountains, Five Zhen Mountains, Four Seas and Four Rivers” symbolized the territorial extent of the dynasty, and because the Divines were considered as deities protecting the dynasty against foreign enemies.

Keywords: Yuan Dynasty of China, Guangzhou as a city, Nanhai temple, “Divines of the Five Yue Mountains, Five Zhen Mountains, Four Seas and Four Rivers”